

学位授与番号：乙 3229 号

氏 名：安藤 裕史

学位の種類：博士（医学）

学位授与日付：平成 30 年 9 月 12 日

学位論文名：

Risk factors for recurrent epistaxis: Importance of initial treatment.

（鼻出血 299 例の臨床的検討 一再出血の要因と治療法の選択）

学位論文審査委員長：教授 宮脇剛司

学位論文審査委員：教授 岩楯公晴 教授 尾尻博也

論 文 要 旨

氏 名	安藤 裕史	指導教授名	小島 博己
-----	-------	-------	-------

主論文

Risk factors for recurrent epistaxis: Importance of initial treatment

(鼻出血 299 例の臨床的検討 – 再出血の要因と治療法の選択 –)

Yuji Ando, Jiro Iimura, Satoshi Arai, Chiaki Arai, Manabu Komori, Matsusato Tsuyumu, Takanori Hama, Yasushi Shigeta, Atsusi Hatano, Hiroshi Moriyama

Auris Nasus Larynx. 2014; 41(1): 41-45

要旨

【背景・目的】

鼻出血は最も一般的な耳鼻咽喉科救急疾患の 1 つである。しかし、実臨床において問題となる再出血に関しては報告が少ない。そこで、本研究では、第一に、再出血の要因となる患者背景因子や出血点、止血処置を明らかにすること、第二に、再出血を来しやすい後鼻出血の症例のみを対象に、その再出血率と止血処置の効果を明らかにすること、最後に、これらの結果を基として、耳鼻咽喉科における鼻出血の適切な治療法の選択について考察すること、以上を目的として臨床的検討を行った。

【方法】

今回の後方視的研究では、特殊な病態を除いた 299 名の鼻出血患者が対象となった。患者背景として、年齢、性別に加え、高血圧や抗凝固・血小板薬の服用歴などについて調査を行った。出血点の同定の際、出血点をキーゼルバッハ部位、嗅裂、中鼻道、下鼻道、その他、出血点不明のいずれかに分類し、治療は局所止血剤、電気凝固止血術、もしくはガーゼパッキングを施行した。1 週間後に再診とし、再出血の有無につき確認した。以上のデータを基に、統計解析を行った。

【結果】

再出血は 32 例 (10.7%) に認められ、多変量解析を行った結果、再出血のリスクを高める要因として出血点不明 (調整済みオッズ比 5.67, 95% CI 1.83 - 17.55, $p = 0.003$) が、リスクを軽減する要因として電気凝固止血術 (調整済みオッズ比 0.07, 95% CI 0.03 - 0.17, $p = 0.000$) が抽出された。後鼻出血は 101 例 (33.8%) に認められ、電気凝固止血群で有意に再出血率が低く (6.4% vs. 40.7%, $p < 0.01$)、ガーゼパッキング群で有意に再出血率が高かった (39.5% vs 15.9%, $p < 0.01$)。

【結論】

耳鼻咽喉科医は鼻出血、特に後鼻出血を中心とした難治性の症例に対して、各種内視鏡を用いて詳細かつ確実に出血点を同定に努め、内視鏡下に電気凝固止血術を行うことが重要であり、ガーゼパッキングに関しては出血点不明の症例が多く再出血率が高いため、慎重な経過観察が必要と考えられた。

学位論文審査結果の要旨

安藤裕史（あんどゆうじ）氏の学位申請論文は、邦題“鼻出血 299 例の臨床的検討 – 再出血の要因と治療法の選択”と題する、耳鼻咽喉科学講座小島博己教授の指導による研究である。本論文は 2017 年の impact factor 1.128 の *Auris Nasus Larynx* 誌誌に 2014 年に掲載された。以下に論文内容の要旨と審査委員会の結果を報告する。

平成 30 年 7 月 5 日、岩楯 公晴教授、尾尻 博也教授ご臨席のもと公開学位論文審査会を開催した。

席上、1) 鼻出血に関するガイドラインはあるか、2) 一般開業医にも可能な処置か、3) 歳出血の判断時期はいつか、またその正当性、4) 止血操作を行った医師の診断能力や止血操作技術の影響、5) 再診の医師は初療に当たった医師と同一か、6) 初回出血部位と再出血部位は同じか（他部位からの再出血症例は除外している）、7) 出血点が不明の場合の処置はどのようにしているか、8) 再再出血の症例の頻度、など質問があり安藤氏は何れに対しても的確に回答した。本論文は鼻出血処置後の再出血に関してその発生頻度や病態、推奨される処置を明確にした点で、今後の鼻出血の治療精度の向上に大いに寄与すると考えられた。この点を評価し、慎重審議の結果、学位請求論文として十分価値のあるものと認めた。

なお、審査員からテーシスの体裁として緒言の内容と、幾つかの誤字脱字の修正箇所の指摘があったが、平成 30 年 7 月 15 日にこれらの修正と審査での質疑に対する回答を加筆した原稿の再提出を受け、内容を確認し受理した。